福島を描く 漫画の力と生業裁判

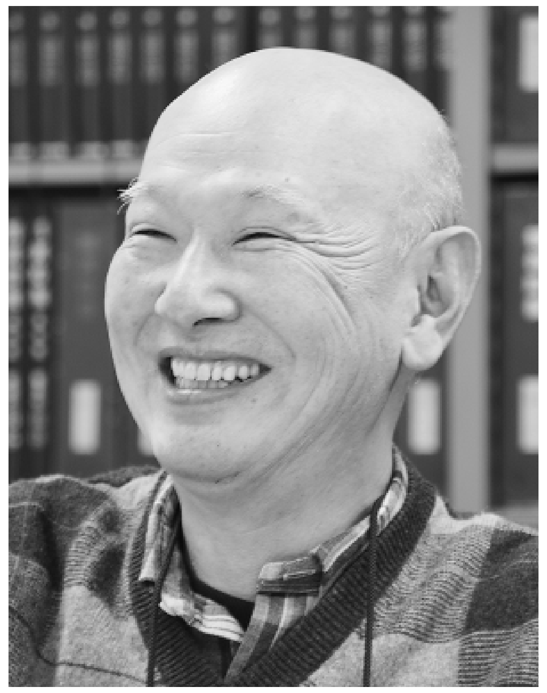
今回のゲストは、漫画家の山本おさむさんです。

山本おさむさんは、病気・障害・国籍・原発事故など、本人には如何ともし難い苦しみや悲しみを負う人々の日常を取り上げ、人々が現実に向き合い、乗り越えようとする営みに光をあててこられました。

連載中の『今日もいい天気』は、そうした創作を重ねてきた山本さんが、自らの生活の視点から、二〇〇七年から始めた福島での田舎暮らし（田舎暮らし編）、その後発生した原発事故後の様子（原発事故編）を描かれたものです（現在、完結編を連載中）。

今回は、この『今日もいい天気』を題材に、お話は、昨年一〇月に出された「生業訴訟」判決や、漫画が持つ力に及びました。

「やっぱり一番は、生業裁判が勝ってよかったということですね」



山本（やまもと）おさむ さん

漫画家。1954年生まれ。1981年から漫画アクションにて「ぼくたちの疾走」を連載し人気を博する。また、「遥かなる甲子園」「わが指のオーケストラ」「どんぐりの家」と、障害を持った児童の、懸命に生きる姿を描き、大きな反響を呼んだ。
2007年、福島県天栄村に移住するも、2011年の原発事故で、避難生活を余儀なくされる。現在、「赤狩り」（ビッグコミックオリジナル）、「今日もいい天気」（赤旗日曜版）を大好評連載中。
主な著作に「そばもんニッポン蕎麦行脚」（ビッグコミック）、「聖―天才・羽生が恐れた男―」（ビッグコミック）、「天上の弦」（ビッグコミック）等人気作品多数

弁護士
樋谷　賢一
ひたにけんいち

福島・天栄村での生活

馬奈木　先生は「今日もいい天気　田舎暮らし編」で、天栄村と埼玉を往復しながらの生活を描かれていますが、どのような経緯で天栄村に暮らすことになったのでしょうか。

山本　田舎暮らしをしたいというよりは、都会の暮らしからちょっと逃げたいというのがありました。当時は、毎日一六時間、机の前に座っているような生活で、それを長年続けてきたら心身ともに病的になってきたので、これはまずいなと。たまたま、家内の両親の出身地である天栄村の温泉に行ったんです。非常にいいところだったので、軽い気持ちで、こういうところに住めたらいいなとか言ったら、帰って二〜三日後ぐらいに、親戚のおじさんがこういう売家が出ているぞってFAXを送ってくれて。広くて安いもんですから、いろいろ考えて、思い切って引っ越したんです。

馬奈木　天栄村での生活はいかがですか。

山本　近辺に日帰りできる温泉が幾つもあって、リフレッシュするのには温泉が一番ですね。整形外科病院の中にある温泉が意外とよかったり、うどん屋さんの奥に、うどんを食べるとタダで入れる温泉があったり、というのも楽しいですね。それから、犬と一緒に散歩できるのもいいですし、お米とか野菜もおいしいですね。

宮内　私は生まれも育ちも東京で、いわゆる田舎というところは身近ではなかったのですが、作品を読むと田舎のいいところも大変なところもすごくリアルに感じて、おもしろかったです。実際に住んでみて、都会と違うことや感動したことはありますか。

山本　一番いいのは温泉ですけど、起きたら本当に寒かったり、寝ていても寒くて目が覚めたりとか、自然を身近に感じられることですよね。マンションだと真冬でも、起きて、ああ寒いっていうことはそんなにないので。

坂　埼玉で暮らしていた時期と比べて日常生活は変わりましたか。

山本　三〇代の頃までは、一六時間仕事して、三時間ぐらい飲んで、寝ての繰り返しで、外に出るのはタバコを買いに行くぐらいの、本当に病的な生活だったんですね。だから、やっと歩けるようになったという感じですね。

樋谷　途中から奥様のご両親も同居されたんですよね。

山本　そうですね。両親も埼玉に住んでいたんですけど、老老介護をしていたので、田舎のことはわからないから一緒に来て下さいと誘って、来てもらったんです。

樋谷　作品の中では、地元に戻ったご両親が、最期まで生き生きと生活されている様子が描かれていたので、やはり田舎というか、育った故郷というのは、人生の最後のすみかに相応しいと感じました。

福島第一原発事故

馬奈木　田舎での充実した生活が原発事故で一変したと思いますが、事故当時はどのような状況でしたか。

山本　東日本大震災のときは、僕は仕事で埼玉に、家内は天栄村に滞在していました。福島に原発があることは知っていたんですけど、全然気にしてなかったんです。地震後もテレビで専門家が大丈夫だと言っていたので、大丈夫だと思っていたんですけど、ネットを見ると危険だという意見が出ていて。当時は放射能そのものよりも、原発が爆発して過酷な事故に発展するんじゃないかという恐怖のほうが大きかったですね。ですから一時避難のつもりで、一週間もすれば帰れるだろうという気持ちで避難しました。

坂　ところが、徐々に、そんな簡単な話でもなさそうだということがわかってきますよね。

山本　避難してから、テレビをつけっぱなしにしていたんですけど、テレビに出る人ほとんど全員が大丈夫だと。どうもおかしいなと思い、ネットで調べたら、大丈夫ではないという意見もある。そこから迷い始めて、どちらの言っていることが本当なのか、よくわからないんですよね。だから、危ないぞというほうに立場をとっておいたほうが後悔しないだろう、大丈夫のほうを信じて後で健康被害が出たら遅いと思い、できるだけ危険寄りに考えて行動するようにしました。

弁護士
馬奈木厳太郎
まなぎいずたろう

宮内　事故後、初めて天栄村に入ったのはいつ頃ですか。

山本　家の世話をしてくれた親戚のおじさんが亡くなって、その葬儀に出るために、四月に帰ったときです。ある人から、こういうところに帰ってきたくなかったでしょうみたいなことを言われて、ああ、そういう感情もあるんだなと。考えてみれば、避難するということは、ここは危険だと思っていることを表す行動ですから、残った人の中には、あまり快く思わない人もいるなと。近所の方で、逃げられるんだったら逃げたほうがいいよと言って下さった方もいましたが。その頃になると、ネット上で空間線量を見ることができるようになったんですが、とても帰れるような線量じゃなかったので、本格的に埼玉で避難生活を始めなきゃいけないなという感じでした。

樋谷　同じ地域、同じ立場の人でも、とった行動は様々でしたよね。

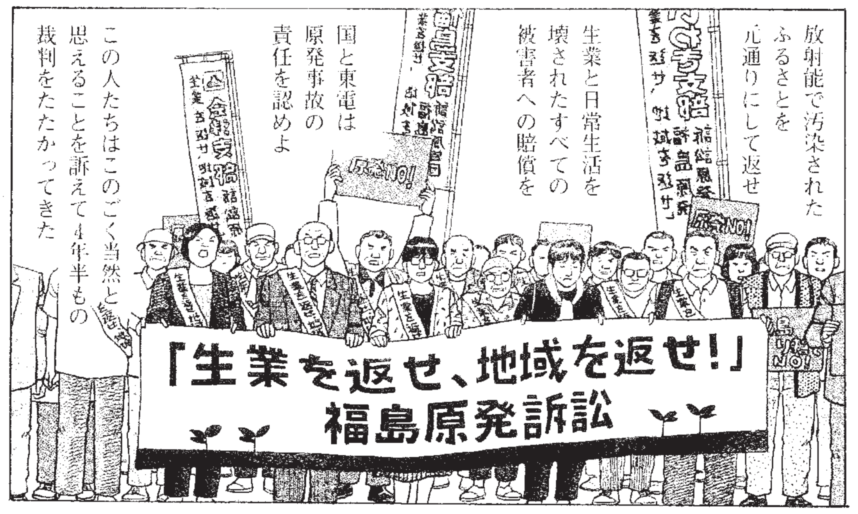
山本　別の親戚には、自分だけ残って、お母さんと小さい子どもはお母さんの実家に一時避難させた方もいましたが、田舎で暮らしていると、避難したくてもできないっていうのがあると思うんですよね。特に農業をやっていて畑や田んぼを持っている人は、それを守らなきゃいけないですし。逃げたくても逃げられない、逃げた先で生活をしていく手だてもないという方がほとんどだったんじゃないかなと思います。

馬奈木　作品の中でも小学生がマスクをしないという場面がありましたが、一人一人の選択、例えばマスクをする・しないとか、避難する・しないとか、日常的に色々あったと思います。間近でご覧になって、それぞれ反応が違うことについて、どのように感じられましたか。

山本　実際には選択できなかったんじゃないかと思うんですよね。僕はたまたま埼玉に事務所があったんで避難できましたけど、両親が生きていたらそういう選択はできないので、残っていたと思います。ただ、残るっていうのは、そうせざるを得ないということであって、自由な選択じゃないですよね。僕みたいに、よそ者として田舎に来た人間は簡単に避難できるけれど、何代もその土地に住んでいる人は、避難するという選択はほとんど不可能だったんじゃないかと思います。

樋谷　選択というのは、本来、正しい情報を与えられた上で自分で判断するというのがあるべき姿ですが、今回の場合は、そもそも正しい情報が与えられていなかったと思います。作品でも言及されていましたが、情報のあり方、とらえ方についてどのようにお考えですか。

山本　事故後すぐには線量が公表されませんでしたし、SPEEDI（注）も公開されなかったんですよね。結局、初期の政府や東電の対応があまりにも不誠実だったんで、疑いの目で見るしかないということになっちゃいますよね。また当時、テレビやネット、雑誌などでいろんな情報が出るんですけども、専門的な議論なので、素人には判断できないですし、様々な情報の中から、何が正しいのかを判断するのは難しかったと思います。



放射能で汚染されたふるさとを元通りにして返せ
生業と日常生活を壊されたすべての被害者への賠償を
国と東電は原発事故の責任を認めよ
この人たちはこのごく当然と思えることを訴えて4年半もの裁判をたたかってきた
「生業を返せ、地域を返せ！」
福島原発訴訟

「今日もいい天気（完結編）」第45話より

生業訴訟

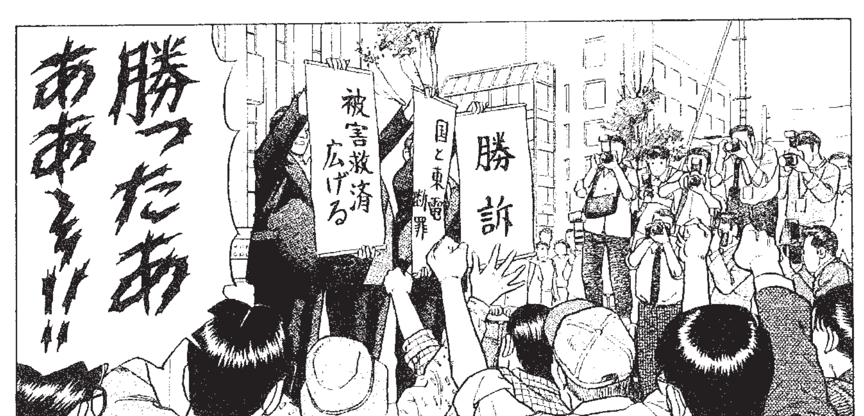
坂　「今日もいい天気」の連載の中で、生業訴訟が取り上げられているのですが、どのようないきさつがあったのでしょうか。

山本　パート2の「原発事故編」で自分の自主避難の経験を描いたのですが、自分以外の人がどのようにしているのかをほとんど知らなかったので、最後のところで大熊町に行くことなどを描いたんです。パート3は完結編ですけれども、それを始める以上は、福島のその後のことも何とか盛り込みたいなと思っていました。たまたま、知り合いの記者から生業裁判というのをやっているんで、傍聴しに行きませんかというお誘いを受けたんですね。

弁護士
坂　勇一郎
さかゆういちろう

馬奈木　作品の中では、楢葉町でおそば屋さんをやっていたYさん（「完結編」20〜23話）が一つの軸になっていますが、最初に傍聴した時、Yさんが証言されていたんですよね。傍聴して、どのような感想をお持ちになりましたか。

山本　僕自身が自主避難しており、東電に対してちょっと許せないという気持ちを持っていたんですけども、自分以外の人がどういう気持ちでおられるのか興味津々でした。傍聴に行ったら、白河の方とか須賀川の方とか、自分のすぐ近くの方が証言をされたので、あらためて我が事のような感じで聞きました。そのとき、Yさんの証言も聞いたのですが、僕は「そばもん」という漫画を描いていたものですから、東京での二〇年間の修業がいかに大変だったかというのが手に取るようにわかる気がして、Yさんの話に非常に共感するとともに、ショックを受けました。裁判が終わった後、Yさんと話す機会があり、Yさんの話を軸に漫画を描けるんじゃないかなと思ったんです。また、生業訴訟の陳述書集などを読んで、この方たちのことを描けば福島のその後を何とか伝えられるんじゃないかなと思いました。



勝ったあああ!!
被害救済広げる
国と東電断罪
勝訴

「今日もいい天気（完結編）」第45話より

樋谷　裁判所での陳述を聞いていると、当事者ならではの体験、苦痛、苦労などがにじみ出てくる内容なんですね。ただ、裁判所での陳述はテレビ撮影できない。そこで、当事者の声をいかに他の人に伝えるかというのが大きな課題になるのですが、今回のように作品で取り上げていただくことは一つの伝達手段になると思いました。

山本　「今日もいい天気」で裁判を描くとあまり反響がないのではないかと心配していたんですが、けっこう反響がありました。福島の人たち一人一人に起こっていることがよくわかったという手紙もあって、ちゃんと描けば読んでもらえるんだなと実感しました。

馬奈木　もうすぐ完結編も描き終わると思いますが、福島の物語としてどのような感想をお持ちですか。

山本　やっぱり一番は、生業裁判が勝ってよかったということですね。福島に対する共感とか応援が急速に薄れている雰囲気の中で、この裁判は、あらためて当時のことを思い出させ、なおかつ共感を得られる流れをもう一回つくり出したんじゃないかなと思います。

漫画の力

坂　漫画じゃないとこれは表現できなかったとか、漫画でよかったなと、思うことはありますか。

山本　新聞記事は事実に関する文章が中心ですが、漫画は叙事詩を叙情詩に変えるような側面が非常に強いんですね。人物の事実を描くよりは心情を描いて、感情を描いてというような、登場人物に感情移入させるという力を持っています。また、漫画家の力量になってくるんですけども、登場人物の気持ちを追っていきながら、共感するとか、そういう表現ができるところが大きな武器じゃないかと思います。

宮内　例えば原発だったら、放射能の話だとか農業の話だとか、内容はけっこう専門的なお話ですよね。それを登場人物に感情移入させて読ませるのには高い技術が必要だと思うのですが、制作の際に特に意識されていることはありますか。

山本　「そばもん」もそうですし、障害者関連の漫画もそうですけど、取材の前にできるだけ資料を集めて、資料をいかに読み込んでから取材に行くかということですね。せっかく当事者に会うので、一番深いところを聞くように心がけています。

坂　先生の作品は、現在進行形で動いている中でつむぎ出され、世に出したものがまたそこに影響を及ぼすということがあると思うのですが、どのような感覚を持って取り組まれているのでしょうか。

山本　障害者とか、病気の棋士とか、はたまた原発とか、今は「赤狩り」を描いたりしていますけども、僕は自分がマジョリティに属していると思ったことは一度もないので、ついそういう題材ばっかり選んじゃうんですよ。特に障害者の漫画は三本描きましたけど、そのときに運動というものを初めて知ったんですね。障害者の世界に入ると、運動が福祉をつくっているというのが非常によくわかって、運動がなかったら福祉はないと言ってもいいような感じなんですよね。運動が障害者に関する価値観を刷新して、世の中を変えたり、法律や制度を変えたりしている。漫画家として言えば、まず一般の人は障害者を知らない、障害者イコールかわいそうな人とか、生産性が低くて世の中のお荷物とか、そういうイメージばっかりに毒されている面があるんで、ちょっと中に入って見てみると全然違うぞということ、むしろ障害者運動から学んだことを作品化して世の中に返していくというんでしょうかね。そうすると、また世の中から反応が返ってくるんです。当事者の中に入っていって学んだことを漫画にする、しかも娯楽として完成度の高いものを発表する。そうしないと、かえって、くそまじめなだけでおもしろくない漫画だなって言われる危険性があるんです。おもしろいと感じる、読んでわっと泣いちゃう、そういうことを通してわかってもらって、そういう人たちの反応がまた障害者なりそういう人たちに返っていく、そういう循環をつくり出す役目が漫画にはあるんじゃないかなと思っています。

事務局
宮内　鶴代
みやうちつるよ

注　SPEEDI　緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステムの略称。